

ジャーナリズム研究における ジャーナリスト調査の意義と方向性[※]

山口 仁*

1 「2022年ジャーナリスト調査」に向けて

日本大学法学部新聞学研究所では、「デジタル化社会の進展における現代日本のジャーナリズムの変容に関する研究（代表者：佐幸信介）」として、メディア環境の変容によるコミュニケーション、そしてジャーナリズムの社会的機能・役割の変容について研究プロジェクトを遂行している。その一環としてマス・メディアで活動するジャーナリストに対するヒアリング調査を実施、現代のジャーナリズムの現場でどのようなことが問題視されているのかを考察してきた。こうした調査をもとに、ジャーナリストを対象にした質問紙（アンケート）調査を行い、広く問題意識を把握していく予定である。

表1 調査に向けたスケジュール（新聞学研究所共同研究計画書より）

2022年 4月	学内研究会
2022年 6月	日本メディア学会春季大会でワークショップ実施
2022年 7月	質問紙の設問内容の決定
この間、質問内容の微修正と調査のための web フォーム（調査画面）の作成、関係各所への調査依頼	
2022年 9月	調査体制の確定。
2022年10月	調査実施（1～2か月間）。
2022年12月	結果の修正、WJS にデータ提出。
2023年 1月	調査結果の概要をもとに J&M に論説を投稿

※予定につき変更の可能性もある

2 ジャーナリズム論のためのジャーナリスト調査

調査を通じてジャーナリストの意識を把握してそれを公表していく活動には、ジャーナリズム論としての意義もある。一部のジャーナリズム論には現場のジャーナリストの声が反映されていないのではないか、という指摘があるからである。

かつて有山輝雄は、日本新聞学会（その後の日本マス・コミュニケーション学会、現在は日本メディア学会）のワークショップの報告で、ジャーナリズム論を①新聞社の社員など現場のジャーナリストが自分たちの仕事を対象化して立論したもの、②学者・評論家などジャーナリズム活動を日

*やまぐち ひとし 日本大学法学部新聞学科 准教授

常的にしているわけではない者が行う批判・評論、の二つに分類した（有山ほか1986、216参照）。なお、このうち後者のジャーナリズム論については、同じワークショップの中で新井直之（元共同通信社・当時創価大学教授）が以下のような指摘をしている。

研究者、評論家などのジャーナリズム論は現場のジャーナリストの心理に触れることがほとんどない。現役の記者にとって何よりの問題は同業他社との競争だ。抜くか抜かれるか、あるいはデスクに部長に一言ほめられたいという卑近な願望、その心理と無縁なジャーナリズム論は有効性をもたないだろう（有山ほか1986、224頁、傍点は引用者）

これはジャーナリズム活動を外部から考察・研究しても、ジャーナリズムの現場で働く者の心理（や意識）はとらえられないという指摘である。確かに理念的、抽象的、そして規範的に「外から」ジャーナリズムを論じる研究にはこうした側面があることは否定できないだろう。

だが「現場の心理」をとらえていないのは、果たして「外部」からのジャーナリズム論だけなのだろうか。かつて鶴木眞は、客観報道に関する「マスコミ批判」を以下のように批判したことがある。

報道の自由、報道の客観性を考える時にこれらの伝統的な問いが提起され続ける理由は、マスコミ批判の現場に「閉塞状況」が存在することも無視することはできない。…（中略）…現役のジャーナリストたちは、自分たち（マスコミ企業を退職した人々：引用者）のできなかったことを棚に上げて単なる理念や情念で後輩の意識や行動の改革を迫る仕方はフェアでないと感じているのである（鶴木1999、191-192頁）

有山の分類でいう「現場のジャーナリストが自分たちの仕事を対象化して立論したもの」であっても、実際にそうした議論を公に行っているジャーナリストはどれくらいいるだろうか。確かにジャーナリストが執筆したジャーナリズム論関連の書籍は多数あるし、日本新聞協会発行の『新聞研究』のようなジャーナリズムのあり方について論じる媒体もある。しかし、自己の活動を対象化して論考を公表している者は、ジャーナリスト全体から見れば多くはないはずである。

他方、②のジャーナリズム論で言うところの「外部」の範囲は、現代のメディア環境では拡大している。誰もがインターネットを通じてジャーナリズムについて論じ、それを発信することが可能になっているからである。

ここに、学者・評論家によるジャーナリズム論からはもとより、現場のジャーナリストによるジャーナリズム論からも、そしてインターネットが可視化させた多くの「マスコミ批判」からも見えてこない「現場のジャーナリスト」の声にどうアクセスすることが出来るのかという問題が存在する。

3 日本における主なジャーナリスト調査

日本においてジャーナリズムの全体像を明らかにしようとする調査は、以下のいくつかの調査がある程度で十分に行われてきたとは言いがたい（『ジャーナリズム&メディア』第7号、272参照）。本

節はこのうち、民放連による調査以外の4つの調査においてどのようなことが聞かれてきたのか、質問文・選択肢を概説していきたい。

なお調査の質問文や選択肢に関しては若干の変更（句読点の位置、選択記号の省略など）をしている。

- ・1973年 「現代の新聞記者意識」 日本新聞協会研究所
- ・1994年 「新聞記者調査」 日本新聞協会研究所
- ・1996年 「報道担当者調査」 日本民間放送連盟 ※今回は取り上げていない
- ・2007年 「日本のジャーナリスト1000人調査」 日本大学法学部新聞学研究所
- ・2013年 「日本のニュースメディアの現状に関する調査」 日本大学法学部新聞学研究所

3-1 何が聞かれたか

① 1973年日本新聞協会研究所「現代の新聞記者意識」『新聞研究』（1973年10月号）8-49、69-75頁より。

「第二次世界大戦後、新聞に関する調査は、数多く行われているが、“記者”を対象にした調査は非常に少なく、皆無といっても過言ではない」「ほぼ全国にわたり、このような大規模な調査を実施したことは初めて（『新聞研究』1973年10月号、8頁）」と述べられるように、新聞記者を対象とした初の大々的な調査である。以下は質問文の概要である。

- ・フェイスシートで聞いている項目：年齢、学歴、勤務先（中央紙、ブロック紙、ローカル紙、通信社）、働いている部門、勤務年数、転職経験、地位・役職、住宅（社宅、借家、持家）、年収、勤務地（本社、支社、支局・通信局）。
- ・新聞記者について、次のようなイメージがあります。あなたは以下にあげる項目のうち、あなたの気持ちに近い順に、三つ選んで下の欄にその順位をご記入ください：カッコいい、自由である、個性を發揮できる、社会の木鐸である、時代の先端を行く、ヤクザな商売である、エリート意識が強い、清貧に甘んじる、遊び好きである、普通のサラリーマンと同じである。
- ・あなたは現在のあなたの仕事を学生時代の友人に対して誇らしく思いますか
- ・あなたは自分の社のバッジをつけていますか
- ・次にあげる編集局内の部門で、あなたがやってみたいと思うものを三つ選んで○をおつけください：整理、校閲、政治、経済、社会・内政・首都、外報（外信）、科学、学芸・文化、運動娯楽、写真。
- ・あなたは管理職になるチャンスがきたら、管理職を選びますか、それとも欧米の記者のように、年をとっても第一線の記者として働きますか。管理職になりたいと思うのはどんな理由からでしょうか：給料があがるから、社会的地位が出来るから、力を振えるから、同僚がなっているから、年だから第一線は無理、家族が喜ぶから、その他。
- ・もし家族あるいは恋人と約束がある場合、何か急な社の仕事が出来た場合、あなたはどうしますか
- ・あなたの仕事はどれほど社会の役に立っていると思いますか
- ・あなたは現在の仕事にやりがいを感じていますか
- ・あなたはどんな動機で新聞記者になりましたか。次の項目の中から三つを選んで下の欄にその

順位をご記入ください：自由である、社会の木鐸である、男性的である、将来性がある、時代の花形である、個性や能力を発揮できる、普通の人々が味わえない体験ができる、誰とでも対等につき合える、書くことが好きである、新聞記者にでもなろうかと思った。

- ・あなたは入社する時、現在の勤務先以外に入社試験を受けましたか：現在の社だけうけた、ほかの新聞社をうけた、他のマスコミ関連企業（放送・出版・広告）をうけた、銀行等の他の一般社をうけた。
- ・もしあなたが生まれ変わるとしたら、やはり新聞記者になると思いますか
- ・次のような問題は新聞で扱いにくいといわれることがあります。あなたご自身で実際に書きにくかったり、扱いにくいと感じられたことがありますか：有名政財界人のスキャンダル、差別問題関係、防衛関係、皇室関係、宗教団体関連、他の新聞社の批判、特定の政党関係、特定の国、セックスのこと。
- ・あなたは次のようなことがあっても社会に知らせるべきだと思うことがあったら記事にしますか：個人のプライバシーを侵しても、国家の機密に触れても、自分の部の上役が記事にすることに反対しても、親しい取材先から記事にしないよう頼まれても、記者クラブ内の協定があっても、自社の営業担当者から反対があっても、タブーにふれても。
- ・あなたは自分の書いた記事や扱った記事についてだれの反応を気にしますか。次の項目の中から三つ選んで下の欄にその順位をご記入ください：取材先、記者クラブ、モニター、週刊誌・月刊誌などの新聞評、読者からの電話・手紙、社内の上役・同僚、家族、新聞関係以外の友人。
- ・記者の仕事や勤務先について次のような不満がきかれます。あなた自身はどの程度の不満を持っていますか。次の項目の中から三つ選んで下の欄にその順位をご記入ください：仕事に追われる、収入が少ない、仕事の価値が社会的に評価されていない、専門知識・技術・教養が得られない、仕事に意義や価値を見出せない、能力や個性を十分に発揮できない、編集方針に不満、経営方針に不満、各部の縄張り意識が強すぎて総合的な仕事や新分野の仕事ができない、時間が不規則だ。
- ・記者は現在あまり自分の能力を発揮できないといわれますが、それはなぜだと思いますか。次の項目の中から三つ選んで下の欄にその順位をご記入ください：自分の能力・努力不足、情実人事がある、派閥が幅をきかせている、仲間が互いに足をひっぱりあう、幹部の意識が低く人を見る目がない、会社組織はしょせん人を生かしきれない、合理化・革新技術で、学歴が優先している、年功序列の考えが根強い、その他。
- ・あなたはこれまで転職の機会があったのに見送ったことがありますか。それはどのような理由からですか：就職先の条件が悪い、会社の上役に申しわけない、危険をおかしたくない、転職してもかわりばえしない、みすみす定年時の退職金をソンする、記者経験を生かせなくなる。
- ・あなたは同じ所属部の人たちとともに働いているという一体感をどの程度感じていますか
- ・あなたは所属の部の懇親旅行や宴会に多少無理をしても参加しますか
- ・あなたはチームで取材するのと、単独で取材するのとどちらがお好きですか
- ・新聞記者は一般労働者と違ってストライキにも限界があるという議論がありますが、あなたはどう思いますか：事情によっては新聞発行（ニュース配信）が出来なくなるようなストライキ

でもかまわない、新聞発行（ニュース配信）に支障のない11時限りストライキならかまわない、ストライキは絶対にいけない。

- ・あなたは国民にぜひ知ってほしいと思ったトクダネを意識的にボツにされたとき、あなたはどのようにしますか：あきらめる、他者にながしたり週刊誌に匿名でかく、政党や関係機関にながす、上役と直接談判する、部会で追及する、会社をやめて自由に書く。
- ・最近、新聞に対する批判がありますが、あなたは次のような批判のうち、あたっていると思われるものを三つ選んで下の欄にその順位をご記入ください：重要な事実を書かない場合がある、事実の報道と主観的な意見が混在している、発表ものが多すぎる、文章・見出しが悪い、値上げの仕方に問題がある、建設的提案がない、広告が多すぎる、批判精神が乏しい、ニュースを持続的に追わない、掘り下げたニュースが少なく表面的だ。
- ・あなたはこれまでの記者としての人生に満足していらっしゃいますか
- ・次のような意見があります。あなたはどちらに賛成ですか。もちろん場合によって、また程度によって違うでしょうが、ひとくちにいうとどちらを重視すべきでしょうか：個人の権利をみとめるには、公の利益が多少犠牲になることがあってもしかたがない、公の利益のためには個人の権利が多少犠牲になることがあってもしかたがない。
- ・あなたは今後5年間の日本の重大問題は何だと考えますか。次の項目の中から三つ選んで○をつけてください：環境・自然保護、資源問題、人口・老人問題、インフレ、国際緊張、性の解放・ウーマンリブ、住民運動の激化、青年・学生運動の激化、土地・住宅問題、価値観の変化。
- ・「法律はどんな時も守るべきである」という意見と「目的が本当に正しいものだと確信が持てるときには、法律を破ることもやむをえない」という意見があります。どちらの考えがあなたにぴったりしますか
- ・あなたは何をしているときに最も楽しいですか：一家だんらん、趣味、仕事、社会活動、勉強、その他。
- ・あなたにとって大切なものは何でしょうか。次の項目から三つ選んで順位をおつけください：国家、会社、余暇、家庭、社会的地位、財産、友人、健康、知識・技術。

なお、この調査に関しては林知己夫が回答をもとに記者のタイプを以下のように分類している（林知己夫「新聞記者タイプを探る ―多次元的分析による―」『新聞研究（1973年10月号56-68頁参照）』）

- ・新聞記者という仕事に誇りを持つかどうか：「誇り高き型」と「誇りなしの型」
- ・職場における態度として「一体感型」：「一体感なしの型」の分類
- ・反対されても記事を書くかどうか：「断固型」と「協調型」
- ・不満があったらやめるかどうか：「反抗型」と「従順型」

そして調査と林（1973）の論考をもとに研究者や新聞関係者らによる座談会も組まれてる（林知己夫、稲葉三千男、田中義久、平松斉、春原昭彦「座談会 いま、新聞記者は…」『新聞研究（1973年10月号78-95頁）』。ここでは新聞記者を「ジャーナリスト」として、「産業労働者」としてという

両側面からとらえている。

- ・「今日の新聞記者がジャーナリストなのか、新聞産業労働者なのかといえば、今度の調査結果を見ても、まあ全体として新聞産業労働者としての生活実態が浮かび上がってきているわけで、その中のどこから、ジャーナリストとしての自分を根拠づけたらいいかという問題の模索が一般的にある」「個性を發揮できて、自由な職業という、ある種のステレオタイプをもって入ってくるわけですが、4年、5年仕事をしていますと、額面どおりにはなかなかいかない。(田中の発言、80頁)」
- ・「いまは、企業も労働者とともに“目標喪失”の時代ですね。それは新聞産業とて同じことだと思うのです。先ほどから転換期ということが言われていますが、かつての新聞界に社会の木鐸という共通の意識があったとすれば、それはもうかなりの程度崩壊してしまって、それにかわるものがまだ生まれてきていないという感じですね。あっても疑似的なものにすぎない(平松の発言、88-89頁)」
- ・「新聞記者という職業については、かなりやりがいを感じ、誇りも持っている。けれども個人のレベルでは特に金とひまという形で出てきているなど不満が非常に多い」「ほんとうにジャーナリストとしての社会的な使命を果たしていくための鍵というのは、どう集団化していくのか、どう組織化していくのかというところだと思うのです(稲葉の発言、93頁)」

② 1994年日本新聞協会研究所「現代新聞記者像」

「現代新聞記者像(上) — 「新聞記者アンケート」から—」『新聞研究』1994年5月号、48-96頁、
「現代新聞記者像(下) — 「新聞記者アンケート」から—」『新聞研究』1994年6月号、52-72頁より。

1973年の調査との継続が意識されており、質問内容にも類似のものが散見される。

- ・フェース項目：年齢・性別、最終学歴、結婚・子供人数、家族・親との同居、配偶者の仕事、住居形態、年収、所属会社、勤務先、勤務地、所属会社、所属部、職位、勤続年数、所属部署配属年数。
- ・一般の人々は「新聞記者」を主としてどのようなイメージでとらえていると思いますか。次の項目の中から、あてはまると思うものを選び、その番号に○をつけてください：社会の役に立つ、時代の先端を行く、多忙だ、自由である、個性を發揮できる、好奇心が旺盛である、エリート意識が強い、ヤクザな仕事である、普通のサラリーマンと同じ、この中にはない。
- ・読者は「新聞」をどのように見ていると思いますか。次の五つのタイプのうち、現在こういう読者が一番多いとあなたが思うものを一つ選んでください：いろいろなメディアがあるが新聞があればほかのものは要らないと思っている、新聞を含めていろいろなメディアを使い分けているが中では新聞が一番重要だと思っている、新聞はいろいろ使い分けしているメディアの中の一つにすぎないと思っている、新聞も必要だがほかのいろいろなメディアの必要性のほうが新聞を上回っていると思っている、ほかのメディアいろいろあるからもう新聞はなくてもいいと思っている。
- ・あなたは読者に対し、どのような印象をもっていますか：読者は長期的な趨勢に関する分析よりも毎日発生する事件の報道に関心をもっている、大多数の読者は様々な面での不平等のよう

な社会構造上の問題に関心をもっている、読者は記事を安易に信じる傾向がある。

- ・ 一口でいって、あなたの所属する会社はあなたにとっていい会社だと思いますか
- ・ あなたはどんな動機で新聞記者になりましたか。次の項目から、あてはまるものを選び、○印をつけてください：社会の役に立つから、時代の先端に行く職業だから、他の職業では味わえない体験ができるから、自由であるから、男女差関係なく働けるから、個性や能力を發揮できるから、好奇心を追求できるから、だれとでも会うことができるから、書くことが好きだから、その他、特に動機はなかった。
- ・ 就職の際、あなたが最も望んでいた職業・業種は何でしたか。次の中から一つだけ選んでください：新聞記者、新聞社、テレビ・ラジオ局・出版など新聞以外のマスメディア関連業種、公務員、教員、著述業、弁護士・公認会計士などの自由業、製造業、サービス業、その他。
- ・ あなたは、転職を具体的に考えたことがありますか
- ・ あなたが、転職を考えられたのは、どのようなことがきっかけですか。次の項目の中から、あてはまるものを選んでください：新聞に興味を失った、新聞の将来に陰りが見えた、政治家や広告主の意向に屈して記事がボツになったりねじ曲げられたりした、自分の意見が幹部に受け入れられなかった、所属の部や持場の変更で仕事の内容が格下げになった、編集以外の部門へ配属されそうになった、自分の能力や個性が發揮できないと思った、能力の限界を感じた、思うように昇進しなかった、給料が思うように上がらなかった、時間に余裕がなさ過ぎると思った、具体的な転職の勧誘があった、他にやりたいことがあった、会社に対する不満・失望、人間関係がうまく行かない、希望の部署・仕事ができない、その他。
- ・ あなたは、現在所属している会社に対し、何か不満をもっていますか。次の項目のなかからあてはまるものを選び、○印をつけてください：組織全体の管理強化が目立つ、社内言論の自由が確保されていない、新聞の厳しい環境に対する危機意識が幹部に希薄だ、非情報関連事業への投資、ニューメディアなど情報関連事業への投資、コンピュータ化優先、教育・研修施策が貧弱だ、労働環境が良くない、福利厚生施策が貧弱だ、適正な人事が行われていない、収入が少ない、その他、特に不満はない。
- ・ あなたは、現在の仕事が世の中の役に立っていると思いますか
- ・ あなたは、現在の仕事にやりがいを感じていますか
- ・ あなたは、現在の仕事に対し、何か不満をもっていますか。次の項目の中からあてはまるものを選び、○印をつけてください：仕事に追われ余裕がない、時間が不規則だ、能力や個性を十分に發揮できない、仕事に意義や価値を見出せない、専門知識・技術・教養が得られない、編集方針に不満がある、各部の縄張り意識が強く総合的な仕事や新分野の仕事ができない、幹部・先輩記者に信頼感をもてない、技術革新のテンポが速すぎる、その他、特に不満はない。
- ・ 読者にぜひ知ってほしいと思った記事がボツになったとき、あなたはどうしますか：幹部に直談判する、部会で問題にする、政党や関係機関にその情報を流す、その情報を他社に流したり週刊誌などに匿名で書く、会社をやめて自由に書く、あきらめる、(再稿する)、(切り口を変えて再稿する)、その他。※カッコは調査票の選択肢になかったもの。次の設問も同様。
- ・ あなたはニュース感覚を形成するうえで、だれから、あるいは何から影響を受けていますか。次の中からあてはまるものを三つ以内で選び、○印をつけてください：同僚記者、先輩記者、

友人や知人、記者教育、読者に関する調査資料、取材源、競争関係にある新聞社の記事、(書籍・読書)、(TVメディア)、(家族から)、その他。

- ・あなたが今後取り組みたいと思う報道のテーマは何ですか
- ・新聞は、次にあげる各機能を一般的にどの程度果たしていると思いますか：情報を読者に早く伝えること、複雑な問題に対する分析を解説の提供、読者の興味をひくと思われるニュースの重点的な報道、未確認情報を掲載しないこと、娯楽と休息の提供、政府が発表する事柄の真実性の調査、立案中の国家政策に関する論点の提供、読者の知的・文化的関心をひく記事の提供、議員・公務員の活動の監視、大企業経営者の活動の監視、社会問題に対する新聞自らの主張。
- ・新聞界が現在抱えている次のような問題について、あなたはよく知っているほうですか。よく知っていると思うものに○印をつけてください：公取委による再販売価格維持制度の見直し、販売正常化問題、新聞の訪問販売法指定商品化、新聞総発行部数の減少、読者・とりわけ若者の新聞離れ、事業税優遇措置の継続問題、新聞の著作権問題、広告主のメディア選別、新聞古紙のリサイクル問題、NIE活動、なし。
- ・あなたは、テレビのニュース報道に対し、新聞記者としてどのような印象をもっていますか：脅威に感じている～ない。
- ・あなたは、今後、社会環境・メディア環境等の変化によって、新聞の影響力が相対的に低下すると思いますか
- ・今後、貴社の夕刊はどうすべきだとお考えですか：朝刊との連続性を重視し夕刊の紙面内容を工夫しながら存続を図る、朝・夕刊を切り離しそれぞれ独自の編集を強める、夕刊を別媒体化し形態も変えてしまう、夕刊の廃止を考える、その他。
- ・新聞批判がよく聞かれますが、次の批判内容であなたが当たっていると思うものがありましたら、○印をつけてください：重要な事実を書かない場合がある、事実報道と主観的な意見が混在している、発表ものが多すぎる、報道が全体に一過性だ、建設的提案がない、問題を掘り下げた記事が少なく表面的だ、出所が明確でない記事が多い、取材源との癒着が目立つ、人権を無視した記事が少なくない、画一的・横並び記事が多い、批判性が乏しい、この中にはない。
- ・あなたは、今の新聞の署名記事の量についてどう思いますか
- ・あなたは、新聞が取材・報道の過程で人権に配慮していると思いますか。報道による人権侵害は、主としてどのような要因で起きると思いますか：取材源の不確実な情報提供または情報提供の拒否、締め切り時間など紙面制作上の問題、メディア間の過当競争、一般市民の立場を軽視する記者の姿勢、記者の専門知識・倫理性の欠如、その他。
- ・これまで、あなたの書いた記事についてプライバシーを侵害したと指摘されたり、抗議を受けたりしたことがありますか。ある場合は何回ありましたか
- ・犯罪報道では、被疑者の氏名を実名にするか匿名にするかという問題が以前からありますが、あなたの考えは、次のうちどれに近いですか：被疑者の氏名は原則として実名にすべきだ、どちらともいえない、被疑者の氏名は原則として匿名にすべきだ。
- ・読者にぜひ知らせたいと思う政府や企業の秘密情報の入手や報道に関する次のような行為を、あなたはどう思いますか：その情報を得るために金を支払う、その情報を政府や企業の許可な

しに記事にする、記事にしないことを約束しその約束を守らない、取材源に迷惑がかかっても記事にする、手紙や写真のような私的な文書などでも許可なく使用する、自分の身分を偽って取材する。

- ・一般に、誤報の最も大きな原因は何だと思いますか：記者の不注意、記者の専門知識の欠如、記者による事実のねつ造、情報源の故意の不正確な情報提供、取材源のミス、締め切り時間の逼迫、メディア間の過当競争、その他。
- ・広告局が立案する紙面企画に、編集局が協力して充実させるべきという意見があります。あなたは どう 思いますか
- ・カラー化や写真・グラフ類の多用など、紙面はビジュアル化がいつそう進む傾向にあります。あなたは この傾向を どう 思いますか
- ・新聞の取材・編集の分野でもワープロ化・コンピュータ化が進められています。あなたは、こうした傾向がもたらす取材・報道への影響をどのようにとらえていますか
- ・あなたは、現在の記者クラブ制度をどう思いますか。次の項目の中から、あなたの考えにあてはまるものを選び、○印をつけてください：同業他社の記者と切磋琢磨できる、取材源との信頼関係を築きやすい、取材源に対する監視の役割を果たしている、多量の情報を得やすい、“特オチ”を防げる、画一的な報道になりやすい、独自取材をしなくなる、記者の足腰が弱まる、情報操作されやすい、会員外の記者に対して閉鎖的だ、“黒板協定”が諸悪の根源だ、この中にはない。
- ・あなたは、現在の形態の記者クラブ制度があった方がいいと思いますか
- ・官公庁が企業など取材源の広報体制が全般に整備されてきており、それが取材に影響しているといわれますが、あなたは どう 感じていますか：取材がしにくくなってきた～取材がしやすくなってきた。
- ・あなたは、俗にいう「夜打ち朝駆け」を日常的にしていますか
- ・今の新聞記者は、一般的に、取材源からのいわゆる発表ものをこなすのに多大なエネルギーを割かなければならず、事象の背景説明や分析などを加えて記事を書く余裕がないといわれます。これについてあなたは どう 思いますか
- ・新聞記者が政府や自治体の審議会の委員になることに対する批判がありますが、あなたは どう 思いますか
- ・次のような問題は、新聞では扱いにくいといわれることがあります。あなたご自身、実際に記事にしなかったことがありますか：防衛関係、天皇・皇室関係、特定省庁の内部事情、特定政党の内部事情、特定の国（外国）の内部事情、有名政治家・経済人のスキャンダル、特定企業の内部事情、宗教団体の内部事情、右翼・暴力団の内部事情、他のメディアの内部事情、差別問題、性に関すること。
- ・あなたは、今の日本に民主主義がどの程度根付いていると思いますか
- ・あなたの休日の過ごし方としてごく普通の行動を選び、○印をつけてください：ゴロ寝している、テレビを見るなどして過ごす、家族サービスをする、友人・知人などと会い歓談する、趣味に当てる、小旅行する、スポーツをする、ボランティア活動をする、地域活動をする、仕事に関係のない本を読む、資格を取ったり教養を高めるための勉強をする、仕事に必要な知識を

得るための勉強をする、雑誌などの頼まれた原稿を書く、会社の仕事をする、炊事・洗濯など家事労働をする、その他。

- ・あなたは、昨年一年間に何日位会社を休みましたか。日曜・祝日を含め年間の総日数をお答え下さい
- ・あなたは、今年の夏休みを連続して何日とりましたか
- ・では、昨年の冬休みは連続して何日とりましたか
- ・あなたは、最近5年間に病気やケガで入院したことがありますか。最近5年間に一つの病気やケガで通算10日以上通院をしたことがありますか
- ・あなたの通勤時間は片道何分位ですか
- ・次の項目について、あなたはご自身をどう思われますか（あるかどうか）：庶民感覚、家族とのだんらん、近所づきあい、ファッション感覚、一般文化・教養への関心、コミック雑誌やまんが本に関する関心、一般常識。
- ・あなたのご家庭やあなた個人の「情報環境」についてお伺いします：所有している情報機器（パソコン、ワープロ、FAX、コピー機、多機能電話、ポケットベル、携帯電話、文字放送受信装置、ない）、自宅で視聴可能なテレビ・ラジオ（NHK衛星放送、WOWOW、CS直接受信、CATVの専門チャンネル、PCM音楽放送、ない）、個人的にパソコン通信に加入していますか。

なお『新聞研究』1994年6月号には解説・論考が複数掲載されている。その中の一つに長谷部剛「『冷めた新聞観』を持ち始めた記者たち」『新聞研究』1994年6月号50-51頁（日本経済新聞社経済部次長）があるが、「記者たちは新聞の現状に疑問を抱き、将来への不安を感じ始めている。それだけでなく、『新聞こそは』という自負も薄れてきているのではないか。若手記者を中心に、新聞観自体が変わってきているのではないか（50頁）」と、若者世代の記者の意識の変容を指摘している、そのうえで「早急に取り組まなければならないだろう」ことがらとして、「若者に支持される新聞づくり」「記者教育の見直し」「記者の流動化への対応」を挙げているが（51頁）、こうしたことがらは現代においてはごく当たり前の問題として認識されているように思われる。ただ、この当時に若者だった世代は2022年現在では総じて50歳以上である。後に少し触れるが、若手記者に対して行ったヒアリングでも「世代のギャップ」は論点の一つだった。現代の若手記者の問題意識にはどのような特徴があるのだろうか。2022年の調査でも明らかにする必要あることがらであると考えられる。

そしてこの調査に関して、印象的だった解説が、新聞記者調査に対する批判を行った辺見秀逸（共同通信社外信部次長）による「楽天的、あまりに楽天的な」『新聞研究（1994年6月号43-46頁）である。

記者とは分析する者であり、分析されることを、ましてや一片の分析データとされるのを嫌うのが常識と思っていた。どうだろう、各人の主張の微細かつ重要な「差異」が四捨五入されて消され、ひと群れの「世代の意識」としてくくられることに、個人としての記者の思想は反発しないのか。自らの仕事について、食品関連アンケートに消費者が回答するように「他人ご

と」みたいに答えて違和感はないのか。…（改行）…もの書きが字を書かず、あらかじめしつらえられた大ざっぱな選択回答例に、唯々諾々とマルなどをつけ自分を重ねてどうしようというのだ。顔のない群れの一人にされるのが嫌にならないのか。（43-44）

こうした調査それ自体への疑問は、それこそかつてピエール・ブルデュー（ブルデュー1991参照）による世論調査批判とも重なるものである。確かに個人の個性を生かした報道をジャーナリズムの重要な要素とするのならば「顔のない群れの一人にされること」は問題であろう。一方で、「ジャーナリズムの英雄譚」が内包している「排除の論理」、すなわち一部の英雄的ジャーナリストをジャーナリズムの模範としそれを要求する規範的議論は、ときに「普通のジャーナリスト」の存在を軽視することにもつながりかねない。⁽¹⁾

辺見の批判的指摘は調査における自覚すべき重要な論点を提示しているものの、調査がジャーナリズムの現場を把握するための役割は部分的に果たしていたこともまた評価すべきであろう。

③ 2007年日本大学法学部新聞学研究所「『日本のジャーナリスト1000人調査報告書』『ジャーナリズム&メディア』第1号、2007年、84-122頁より。

新聞協会や民放連との調査との継続性、また米国のジャーナリスト調査（「The American Journalist」1982-3年、1992年、2002年）との比較を想定して実施された調査。日本のジャーナリズムの特徴の「持続と変化」を明らかにすることを試みた調査である（『ジャーナリズム&メディア』第1号、2007年、86参照）。

- ・フェイスシート項目：性別、年齢、最終学歴、専門教育の有無、所属している企業・団体（新聞社、出版社、テレビ局、ラジオ局、通信社、広告代理店、調査会社、シンクタンク、フリー、その他）、現在の部署・職位、記者経験の有無、記者経験年数、マスコミ・ジャーナリズムに関して定期的に読んでいる専門誌・業界誌、取材・報道活動やジャーナリズムに関する団体・組織に所属しているか。
- ・ジャーナリズムの理念についてうかがいます。本来あるべき姿として、ジャーナリズムにとって重要な機能は何だと思えますか。以下の選択肢の中から、1位から3位まで上位3つをあげてください：権力の監視、政策の提言、世論の喚起、社会的争点の課題設定、社会正義の追求、教育・啓蒙、正確な情報提供、弱者の代弁・救済、娯楽の提供、討論の場の提供、社会的合意の形成、その他。
- ・ジャーナリズムの現状評価についてうかがいます。あなたは、現在のジャーナリズムが以下のような機能を果たしていると思えますか：議員・公務員・企業経営者等の活動の監視、国家政策に関する論点の提供、社会問題に対する自らの主張、興味をひくニュースの重点的な報道、知的・文化的関心をひく記事の提供、政府発表の真実性の調査、未確認情報を掲載しない、情報を読者に早く伝える、娯楽と休息の提供、複雑な問題に対する分析と解説、社会的弱者の救済。
- ・ジャーナリストにはどのようなイメージがあると思えますか。あなたがもっているイメージと、一般の人からどうイメージされているかについて：エリート、社会の木鐸、正義感が強い、オピニオンリーダー、プロ（プロフェッショナル）、尊大、凶々しい、狡猾、無頼、アウ

トロー。

- ・あなたは、取材・報道の重要な局面で判断に迷ったとき、以下のうちどのような点を重視しますか：社長の意向、社内綱領、経営的側面、広告クライアント、編集方針、情報源との関係、ジャーナリズムの理念・倫理、自分の信念、読者のニーズ、他社の動向、デスクの判断、経営幹部の判断。
- ・現在のジャーナリズム活動に対して、以下のような環境の変化がどれくらい影響を与えていると思いますか：個人情報保護法の制定、メディアの保守化傾向、報道被害への社会的注目、他業種のメディア産業への参入、記者クラブ制度への外圧、日常生活へのインターネットの普及、制作現場のIT化、メディア側の自主規制、政治報道など報道の娯楽化、読者・視聴者の減少、労務・経営の管理強化、Webジャーナリズムの発展。
- ・ジャーナリズムの機能について、Web関連の新メディアと既存のマスメディアの関係はどのようになると思いますか：マスメディアのジャーナリズムの機能が低下する、マスメディアのジャーナリズムの機能が活性化する、両者は相互に補完しあう、両者は別々の機能を担い併存する、両者は相乗効果により活性化する、新メディアのジャーナリズムは機能しない。
- ・以下のようなWeb関連の新メディアのジャーナリズム機能をどのように評価していますか：ニュース・メディアのニュースサイト、検索エンジンやポータルサイトの発信するニュース（Yahoo、Googleなど）、インターネット新聞（オーマイニュースなど）、個人の言論活動（ブログ、ホームページ）。
- ・取材活動において、あなたが制約や制限を感じることは何ですか：取材現場へのアクセス、公人へのアクセス、私人へのアクセス、公権力からの圧力、担当以外の自主的取材、社内ガイドライン、情報源の秘匿、個人情報の扱い、取材経費、その他。
- ・現在のジャーナリズムには、どのような問題があると思いますか：重要な事実を書かない場合がある、事実報道と主観的意見が混在している、発表ものが多すぎる、報道が全体的に一過性だ、建設的提案がない、掘り下げた報道が少なく表面的、一般大衆のニーズに迎合している、出所が明確でない報道が目立つ、取材源との癒着が目立つ、人権を無視した報道が目立つ、画一的・横並び報道が多い、批判精神が乏しい、センセーショナルな傾向が強い、その他。
- ・読者や視聴者にぜひ知らせたいと思う政府や企業の秘密情報の入手や報道に関する次のような行為を、あなたはどのように思いますか：その情報を得るために金を支払う、その情報を政府や企業の許可なしに記事にする、記事にしないことを約束しその約束を守らない、取材源に迷惑がかかっても記事にする、手紙や写真のような私的な文書などでも許可なく使用する、自分の身分を偽って取材する、許可なく撮影をしたり録音を行う。
- ・あなたは客観報道についてどのように考えていますか：事実と意見の分離、公正・公平な態度、事実の正確な報道、中立的なスタンス、当事者にならないこと、不偏不党の精神、非党派的な態度、その他。
- ・あなたは、ニュース記事において、事実の報道に解釈を交えることをどのように思いますか：いかなる場合でも許されない、事実と解釈を明確に分ければ許される、主観的意見でなければ解釈を交えても構わない、解釈が背景説明なら構わない、解説記事ならば許される、署名記事ならば許される、海外ニュースの場合は構わない、スポーツ記事の場合は構わない。

- ・あなたは読者・視聴者の存在についてどのようにとらえていますか：ジャーナリズムを信用していると思う、ジャーナリズムに期待していると思う、ジャーナリズムに不安を持っていると思う、ジャーナリズムの必要性を感じていると思う、理性的な判断力を持っていると思う、重要な問題を理解できていない、リテラシーがあると思う。
- ・政治的争点についてあなたの考え方をおうかがいします：自民党・安倍政権、憲法9条の改正、核保有に関する議論、教育基本法の改正、日本の国連常任理事国入り、北朝鮮へのさらなる制裁。
- ・あなたは、以下のような昨今の問題に関するジャーナリズムの報道を、量、質、多様性の面で、どの程度評価しますか：政治資金問題、年金問題、北朝鮮問題、教育問題、格差問題、地球温暖化、裁判員制度、メディアの不祥事。
- ・あなたは取材・報道活動のなかで、官公庁の広報担当者とのどのようなかんけいにありますか：とても協力的、やや協力的、やや対立的、とても対立的。
- ・あなたは取材・報道活動のなかで、政府とのどのような関係にありますか：とても調和的、やや調和的、やや敵対的、とても敵対的。
- ・あなたは御社のジャーナリズム活動をどのように評価していますか
- ・あなたは自らのジャーナリズム活動に対してどれくらい満足していますか
- ・あなたは現在の報道を充実させるためには、どのようなことが必要だと思いますか：記者教育の充実、記者の独立性の確保、報道担当者の増員、経営者の意識向上、経営圧力の排除、外部からの報道への圧力の排除、取材機材や移動手段などハード面の充実、支局・系列局との連携強化、デスク機能の強化、海外取材体制の拡充、外部制作者との協力拡大、報道体制の純社員化、組織内での自由な議論、その他。
- ・あなたは、現在のジャーナリズムに対してどのような疑問を感じますか。自由に記入してください

この調査では自由回答欄のスペースを広く設けた。そうしたこともあって自由回答の回答率は42.7%だった（大井2011、79参照）。調査メンバーの大井が「自由回答には、大規模な数量的調査によって…（中略）…質問票では表現することができない肉声表現されていた（同79頁）」と回顧するように、自由回答欄はジャーナリストの可視化に貢献している。これは、「現場の（普通の）ジャーナリストの声」をとらえるという調査の目的とも整合する試みであると評価できる。一方で、自由回答欄では当該調査のなかで「ジャーナリズム」「ジャーナリスト」が明確に定義されていなかったことに対する批判も数多く書かれたという（同128頁参照）。この「ジャーナリズム・ジャーナリストの範囲」の問題は、2022年調査でも大きな論点になるはずである。

- ④ 2013年日本大学法学部新聞学研究所「2013年版日本のジャーナリスト調査を読む」『ジャーナリズム&メディア』第7号、2014年、247-279頁（調査票は272-279頁に記載）より。
- 2007年の「日本のジャーナリスト1000人調査」の継続調査としての側面と、後述するジャーナリズムの国際比較調査「Worlds of Journalism Studies (WJS)」の日本チーム（による調査）としての両側面がある。

- ・【フェイスシート】：性別、年齢、最終学歴、専門教育について、所属する企業・団体（新聞社、テレビ局、ラジオ局、通信社、その他）、所属部署・職位・担当分野・所属記者クラブ、兼務している仕事、本職以外の有給活動とその内容、税込み年収（選択肢）、所属年数、取材活動やジャーナリズムに関係する団体・活動に自主的に参加しているか。
- ・ジャーナリズムの現状評価についていかがいます。あなたは、現在のジャーナリズムが以下のような機能を果たしていると思いますか：議員・公務員・企業経営者等の活動の監視、国家政策に関する論点の提供、社会問題に対する自らの主張、興味をひくニュースの重点的な報道、知的・文化的関心をひく記事の提供、政府発表の真実性の調査、未確認情報を掲載しない、情報を読者に早く伝える、娯楽と休息の提供、複雑な問題に対する分析と解説、社会的弱者の救済。
- ・ジャーナリズムの役割に関するそれぞれの項目の重要性についてお聞きします。以下について、あなたの評価としてあてはまるものに1つずつ○をつけてください（とても重要、かなり重要、まあ重要、あまり重要でない、重要でない）：観察者に徹する、あるがままの出来事を報道する、時事問題の分析を提供する、政治指導者を監視・調査する、ビジネスを監視・調査する、政治的議題を設定する、世論に影響を与える、社会変化を唱道する、政府の敵対者となる、国家の発展を支援する、政治指導者の好意的なイメージを伝える、政府の政策を支持する、娯楽と休息を提供する、もっとも多くの読者・視聴者を引き付ける種類のニュースを提供する、日常生活のための助言・方向づけ・指示を与える、人びとが政治的決定をするために必要な情報を提供する、政治活動に人びとが参加するよう動機づける、人びとに見解を表明するように促す。
- ・ジャーナリズムへの影響の度合いが時代の経過とともに変化してきました。以下について、影響の度合いの評価として、あてはまるものに1つずつ○をつけてください（影響が非常に強まった、影響が多少強まった、かわらない、影響が多少弱まった、影響が非常に弱まった）：ジャーナリズム教育、倫理的基準、競争、広告の配慮、利益向上の圧力、パブリック・リレーションズ、読者・視聴者調査、ブログのようなユーザーの作るコンテンツ、TwitterやFacebookのようなソーシャルメディア、読者・視聴者のニュース制作への参加、読者・視聴者のフィードバック、センセーショナルなニュースへの圧力、欧米流のジャーナリズムの実践。
- ・ジャーナリズムは今大きく変化しています。以下はジャーナリズムの仕事に関わる重要な要素です。あなたの評価として、あてはまるものに1つずつ○をつけてください（非常に増加した、多少増加した、かわらない、多少減少した、非常に減少した）：編集上の決定をするジャーナリストの自由、ジャーナリストの平均労働時間、記事の調査に利用できる時間、ジャーナリストの読者・視聴者との交流、専門技術的スキルの重要性、サーチ・エンジンの利用、大学の学位をもつ重要性、ジャーナリズムや関連分野の学位をもつ重要性、ジャーナリズムの信頼性、読者・視聴者のニュース制作への参加、読者・視聴者のフィードバック、センセーショナルなニュースへの圧力、社会にとってのジャーナリズムの現実的意義。
- ・以下は主として内部的な影響要因のリストです。あなたの取材・報道などの仕事の際、どの程度影響がありますか：あなたの個人的な価値観や信念、同僚のスタッフ、あなたの上司、会社

の編集責任者、会社の会長や社長、変種方針・政策、広告のクライアントへの配慮、利益の期待、読者・視聴者調査やデータ、ニュース取材資源の利用可能性、時間の制約、ジャーナリズムの倫理、宗教的配慮。

- ・以下は主として外部的な影響要因のリストです。あなたの取材・報道などの仕事の際、どの程度影響がありますか：あなたの友人・知人・家族、他のメディアの同僚、読者・視聴者からのフィードバック、競争関係にあるニュースメディア、メディア法や規制、情報へのアクセス、検閲、政府官僚、圧力団体、パブリック・リレーションズ (PR)、軍・警察・国家安全保障。
- ・現在のジャーナリズム活動に対して、以下のような環境の変化はどれくらい影響を与えていると思いますか：個人情報保護法の制定、メディアの保守化傾向、報道被害への社会的注目、他業種からのメディア市場への参入、記者クラブ制度への外圧、日常生活へのインターネットの普及、制作現場の IT 化、メディア側の自主規制、政治報道など報道の娯楽化、読者・視聴者の減少、労務・経営の管理強化、Web ジャーナリズムの発展。
- ・現在のジャーナリズムには、どのような問題があると思いますか：重要な事実を書かない場合がある、事実報道と主観的意見が混在している、発表ものが多すぎる、報道が全体的に一過性である、建設的提案がない、掘り下げた報道が少なく表面的、一般大衆のニーズに迎合している、出所が明確でない報道が目立つ、取材源との癒着が目立つ、人権を無視した報道が目立つ、画一的・横並び報道が多い、批判精神が乏しい、センセーショナルリズムの傾向が強い、その他。
- ・「非常に重要な情報の入手や報道」に関する、次のような行為をあなたはどのように思いますか：秘密の情報を得るために金を支払う、秘密の情報を政府や企業の許可なしに記事にする、記事にしないことを約束しその約束を守らない、記事を得るために消極的な情報提供者に圧力をかける、手紙や写真のような私的な文書なども許可なく使用する、他の誰かを装って取材する、隠しカメラ・隠しマイクを使う、内部の情報を得るために職をえる、俳優を使ってニュースを再現したりドラマ化したりする、情報源から金を受け取る、情報源からの引用を改変したり捏造する、写真を改変する。
- ・ジャーナリズムにおける異なる倫理的アプローチについて、あなたの評価を教えてください（強く同意する、まあ同意する、どちらともいえない、あまり同意しない、全く同意しない）：ジャーナリストは状況やコンテキストに関わりなく常にプロフェッショナル倫理コードを守るべきである、ジャーナリズムでは何が倫理的かは個々の状況に依存する、ジャーナリズムでは何が倫理的かは個人の判断の問題である、極めて特殊な状況の場合には道徳的基準を一時棚上げにすることはやむをえない。
- ・ジャーナリズムの機能について、〔Web 関連の新メディア〕と〔既存のマスメディア〕の関係はどうかと思いますか：マスメディアのジャーナリズムの機能が低下する、マスメディアのジャーナリズムの機能が活性化する、両者は相互に補完しあう、両者は別々の機能を担い併存する、両者は相乗効果により活性化する、新メディアのジャーナリズムは機能しない。
- ・以下のような Web 関連の新メディアのジャーナリズム機能をあなたはどのように評価していますか：マスメディアが作成しているニュースサイト、インターネットの専門ニュースサイト、サーチ・エンジンやポータルサイトの発信するニュース (Yahoo、Google など)、ブログ、

Facebook、Twitter、ニコニコ動画。

- ・あなたは、以下のことがらについて、個人としてどの程度の自由をもっていると思いますか。(完全な自由をもっている、かなり自由をもっている、ある程度自由をもっている、ほとんど自由をもっていない、全く自由をもっていない)：記事を書くにあたって記事を選択する自由、「記事のいかなる側面を重視して書くか」についての選択の自由。
- ・あなたは、現在所属されている企業のジャーナリズム活動をどのように評価していますか
- ・あなたは自らのジャーナリズム活動に対してどれくらい満足していますか
- ・あなたは記者職から得る収入に対してどれくらい満足していますか
- ・あなたは現在の報道を充実させるためには、どのようなことが必要だと思いますか：記者教育の充実、報道担当者の増員、経営者の意識向上、社外からの報道への圧力の排除、取材機材や移動手段などハード面の充実、支局・系列局との連携強化、デスク機能の強化、海外取材体制の拡充、外部制作者との協力拡大、報道体制の純社員化、職場で自由な意見交換ができる雰囲気、その他。
- ・あなたは、ジャーナリストが果たすべき重要な役割をどのように考えていますか。もっとも重要だとお考えになる役割を3つ以下の空欄に記入してください
- ・あなたは、現在のジャーナリズムに対してどのような問題を感じますか。以下の欄に自由に記入してください

3-2 誰が調査対象とされたのか？

それぞれの調査の調査対象者は以下のとおりである。新聞協会の調査対象が「新聞記者」という比較的明確な範囲を取っているのに対して、日本大学の調査では、より多様なジャーナリストを対象範囲にしている。もっとも、それが「誰をジャーナリストと見なすのか」という論点を想起することになる。

1973年 「現代の新聞記者意識」日本新聞協会研究所

「調査対象者は、日本新聞協会編集委員社48社の全記者13451名の中から、ランダムサンプリングによって1900名を抽出して調査を行った」「この調査で対象とした記者とは、いわゆる取材各部の第一線記者、デスクで、内勤部門では、整理、校閲両部門のみを対象とした。したがって、編集局の中でも、調査、記事審査、通信・連絡、編集庶務などは対象からはずした。また部長以上の管理職も対象から除いたが、部長でも第一線で取材活動を行っている記者一特派員、編集委員など一は対象にいれている。」(『新聞研究』1973年10月号、9頁)

1994年 「新聞記者調査」日本新聞協会研究所

「調査対象は、新聞協会主要会員社の編集局長、報道局長によって構成される編集委員会の委員社57社のうち、放送会員社(NHK、在京民放キー局)を除く新聞・通信51社の記者約1万5千人から抽出した2800人とした。抽出に当たっては、取材・報道活動の現場業務に直接従事する第一線記者の意識を探るという目的に沿い、部長以上の管理職を除外して記者、デスクに限定したが、みずから取材に当たる立場の『編集委員』については、社内職位が部長職以上であっても調査対象に含め

た。」(『新聞研究』1994年5月号、48頁)

2007年 「日本のジャーナリスト1000人調査」 日本大学法学部新聞学研究所

「日本在住のジャーナリストを調査対象とするために、標本抽出は有意抽出法とした。ジャーナリストに関して公開されているいくつかの名簿から氏名、住所、所属の判明するジャーナリストを調査対象として抽出した。こうしてジャーナリストを5494人抽出し、質問紙を郵送により送付した結果、1019人から回答を得ることができた」(『ジャーナリズム&メディア』第1号、2007年、87-88頁)

2013年 「日本のニュースメディアの現状に関する調査」 日本大学法学部新聞学研究所

「新聞社、通信社、テレビ局に所属する日本在住の記者、報道関係者を対象とすることとした。ここで報道関係者とはメディアの取材活動に携わっている編集報道部門(論説委員を含む)に所属する人を指す。ただし、取材編集において担当している部門、分野は問わないこととした。日本全国に存在するジャーナリスト全員の連絡先や所在を明らかにすることは方法として困難であるため、今回の調査対象のジャーナリストは、日本新聞協会加盟の新聞社、通信社に所属する記者、そして日本放送協会(NHK)と日本民間放送連盟に加盟するテレビ局に在籍する記者とした…(中略)…対象となった会社は217社、割り付けられた記者数全体は6100人となった。その後、調査対象となる全社に調査依頼を行い、調査への協力が得られた社に対して、割り付けられた数の調査票を郵送で送付する託送調査法を採用した。…(中略)…全体で2200票を託送し、回収数は747票、回収率は33.9%であった。」(『ジャーナリズム&メディア』第7号、2014年、252-253頁)

4 日本大学新聞学研究所プロジェクトにおける調査設計

2022年に実施予定のジャーナリスト調査では、WJS (the Worlds of Journalism Study) の国際調査に参加する形で行う予定である。WJSとは世界のジャーナリズムの現状を評価するために設立されたグローバルな研究者のプロジェクトである。このプロジェクトはジャーナリズム研究者、メディア実務家、政策立案者がジャーナリズム、ジャーナリストを理解することを、目的としている。⁽²⁾

今後はWJSの調査フォーマットを日本のジャーナリズムの文脈に落とし込みつつ、日大のプロジェクトとして行ったジャーナリストに対するヒアリング調査(2021年～)で得られた「労働環境の変化」「世代ギャップ」「業界・勤務先に対する期待と不安」など問題意識を盛り込んでいく予定である。

5 「(普通の現場の)ジャーナリストの声」を把握するための試みとしてジャーナリスト調査

ジャーナリスト調査は外部からそしてジャーナリスト経験者による規範的なジャーナリズム論に反映されにくい「現場のジャーナリスト」の声を把握に努めてきた。実際、いままで行われたジャーナリスト調査は、「ひと群れの『世代の意識』としてくられる」という側面はあったが、自由回答の記述も含めて現場のジャーナリストの声の多くを明らかにすることに貢献してきた。そういう点で、ジャーナリズム論のためにもジャーナリスト調査の重要性は過去も現在も変わらない。

しかし以前の調査が行われて時期と比べて現在のメディア環境では、そもそも「ジャーナリスト(の範囲)」が不明確になっていっている。『ジャーナリズムの境界線』の編者マット・カールソンは、この問題を以下のように指摘している。

ジャーナリズムという呼称は、固定的で安定したものではなく、文脈に応じて異なって適用され常に変化する。それは常に構築されるものなのである。ジャーナリズムをめぐる争いは、しばしば境界をめぐる争いである。

誰がジャーナリストなのか、何がジャーナリズムなのか、適切なもしくは逸脱的なジャーナリズムの行動とは何か、といった定義に関する基本的な問題は、すべて「境界の作業」という観点から理解することができる。(Cralson 2015、2、傍点は引用者)

規範的なジャーナリズム論が時にジャーナリズムの境界線を引くように、調査する活動もまた対象範囲を決める際に「ジャーナリズム」と「ジャーナリズムではないもの」に境界線を引くことによって、「届けられないジャーナリストの声」を生み出してしまう可能性もある。この点に考慮すべきであろう。

この問題と向かいあいながら、未来のメディア環境も想定しつつジャーナリズムやジャーナリストの概念を整理し、ジャーナリスト調査へと落とし込んでいくことが本プロジェクトの今後の課題になる。

※ 本稿は、日本大学法学部新聞学研究所シンポジウム「日本のジャーナリストの過去・現在・未来～ジャーナリスト調査が問いかけたこと、新たに問うこと～」(2022年1月22日・オンライン開催)での報告メモをもとにしたものである。より進んだ考察は今後の課題としたい。

- (1) この点に関しては、2021年日本マス・コミュニケーション学会ワークショップ「ジャーナリズムの未来を語るための方法論としてのメディア史(問題提起者・松尾理也)」や今回の新聞学研究所のシンポジウムのパネル・ディスカッションにおける中正樹氏の議論が参考になる。パネル・ディスカッションの記録は次号のジャーナリズム&メディアに掲載される予定である。
- (2) WJSのホームページより (<https://worldsofjournalism.org/>)

参考文献

- ・「現代の新聞記者意識」『新聞研究』日本新聞協会、1973年10月号、8-75頁。※「編集部」編で文責は春原昭彦。
- ・「現代新聞記者像(上)」『新聞研究』日本新聞協会、1994年5月号48-96頁。
- ・「現代新聞記者像(下)」『新聞研究』日本新聞協会、1994年6月号52-72頁。※(上)(下)ともに日本新聞協会研究所編(文責は赤尾光史)
- ・「日本のジャーナリスト1000人調査報告書」『ジャーナリズム&メディア』2007年、第1号、84-122頁。※「日本大学法学部新聞学研究所」編。
- ・「2013年度版『日本のジャーナリスト調査』を読む」『ジャーナリズム&メディア』2014年、第7号、247-279頁。※執筆者は大井真二、小川浩一、小林義寛、佐幸信介、福田充、山本賢二、宮脇健。

- ・ 有山輝雄、掛川トミ子、桂敬一、江藤文夫、山本武利、荒瀬豊、岡満男他（1986）「ジャーナリズムとは何か 1985年秋季研究発表会ワークショップ A（文責：荒瀬豊）」『新聞学評論』第35号、216-226頁。
- ・ P. ブルデュー著、小松田儀貞訳（1980=1991）「世論なんてない」『社会学の社会学』藤原書店、287-302頁。
- ・ 長谷部剛（1994）『冷めた新聞観』を持ち始めた記者たち『新聞研究』1994年6月号、50-51頁。
- ・ 林知己夫（1973）「新聞記者タイプを探る —多次元的分析による—」『新聞研究』1973年10月号、56-68頁。
- ・ 林知己夫、稲葉三千男、田中義久、平松齊、春原昭彦「座談会 いま、新聞記者は…」『新聞研究』1973年10月号、78-95頁。
- ・ 辺見秀逸（1994）「楽天的、あまりに楽天的な」『新聞研究』1994年6月号、43-46頁。
- ・ 大井眞二（2009）「信頼に足るジャーナリズム——多くの声、ひとつの思い——日本のジャーナリスト「1000人調査」の「自由回答」から」『ジャーナリズム&メディア』第4号、79-132頁。
- ・ 鶴木眞（1999）「国際ニュースとメディア・フレーム」鶴木眞編『客観報道』弘文堂、173-194頁。
- ・ Cralson, M. 2015. “Introduction: the many boundaries of journalism“ Cralson, M. and Lewis, S.C. *Boundaries of JOURNALISM*, 1-19. Routledge.